

連続セミナー 「多文化共生としての舞台芸術 2022」

横山綾香

連続セミナー「多文化共生としての舞台芸術 2022」は4月から12月にかけてオンラインで全6回行われた。本プロジェクトは昨年度に始まったが、視聴者から「ヨーロッパ以外の地域の舞台芸術についても知りたい」という意見が寄せられた。その声を反映して、今年度はドイツ、ウガンダ、中国、インド、イラン、南米をフィールドとする演劇研究者を学外から招いて、各地の舞台芸術についてセミナーを開催することとなった。

第1回は昨年を引き続き、ドイツ演劇研究者の平田栄一郎先生が「共生社会と現代演劇」というタイトルで、共生というテーマに真っ向から取り組んだドイツ現代演劇作品を取り上げて、その意義について論じた。

多様な価値観を認めるがゆえに、多文化共生を志向する社会においては理論と実践が一致しないことは珍しいことではない。演劇においては当事者から一歩引いた距離から理論と実践が乖離するプロセスを見つめ直すことが可能である。たとえば、王が自分の国を調査した結果、問題の原因は自らの統治にあったことに気付くという筋書きのギリシャ悲劇『オイディプス王』を鑑賞するという行為は、まさしく理論と実践が乖離する過程の観察と言える。共生社会の具体的な発想は、このような芸術体験からも生じるものであり、実践世界の議論より多角的な視野で思考することが可能になると登壇者は述べていた。

また、現代では作品の内容のみならず、作品製作の段階から共生に関する取り組みが行われている。事例として筋萎縮性側索硬化症 (ALS) など難病患者が出演者として参加した作品が紹介された。

第2回は、東アフリカの内陸に位置するウガンダ共和国の首都カンパラで流行した「ロパク」パフォーマンス「カリオキ」を研究している大門碧先生が担当した。「カリオキ」は、若者が日常的に聞いているような国内外のポピュラー音楽を用いたパフォーマンスで、夜のレストランやバーで披露されている。その由来は、90年代中頃にカンパラに持ち込まれたカラオケである。若者たちはマイケル・ジャクソンやマライヤ・キャリーといったアメリカの大スターになりきって彼らの曲を歌っていた。その後、アメリカの音楽に合わせたダンスや、実際には歌わないがマイクを持って歌っているようにみせるパフォーマンスである「マイム」を披露する大学生グループが現れ、「カリオキ」が誕生した。次第にウガンダの音楽も取り入れられるようになり、多様な学歴の若者が参入するようになった。

初期の「カリオキ」では歌詞やオリジナルアーティストが強く意識されていたが、大門先生がインタビュー調査を行った2010年頃には曲に対する知識は重要視されておらず、パフォーマーが音楽に対して感じたものを即興的に身体で表現するものへと変化した。「カ

リオキ」は、言葉（＝歌詞や物語）を超えた、身体と音が互いに共鳴することそのものを楽しむ場ではないかと大門先生は結論付けていた。

第3回では、中国近現代文学・演劇研究者の飯塚容先生が中国の現代演劇（話劇）の歴史と日本との関係について解説した。中国における現代劇運動は、清末民初（20世紀初頭）に日本へ来ていた留学生たちが始めた。彼らが参考としたのは日本の新派劇である。演技指導や新派劇の劇場を貸すなど日本の新派俳優も直接的に彼らに協力していた。演目には『椿姫』など西欧由来の演目のみならず、日本人が執筆した『不如帰』など新派劇の演目も取り入れられた。なかには『トスカ』のように歌舞伎や新派劇で翻案された作品をさらに中国化して上演という事例も存在する。

1930年代に東京での中国人留学生の演劇活動はピークを迎える。中国の近代劇を世界的なレベルへと押し上げた戯曲である『雷雨』（曹禺作）が1935年に東京でも上演された。その契機は東大中文科の日本人学生が中国人の演出家に上演を勧めたことであった。このように戦前の日本における中国現代演劇には日本人も深く関わっていた。

その後、戦争で中断した日中の演劇交流の再開は国交回復と文化大革命の終結を経て80年代を待たなくてはならなかった。大規模な演目の来日公演、劇団単位での長期的な交流、演劇祭など様々な形態で演劇交流が行われている。資料に記載された30本以上の演目の中から一部を抜粋して写真や動画が紹介された。

第4回では、アジア各国の比較演劇を長年研究している宮尾慈良先生がインド演劇について講義を行った。インドの演劇は舞踊劇で、中心的な演劇理論書『ナーティア・シャーストラ』では、アビナヤ（身体表現）によって観客にバーヴァ（さまざまな感情）を起こさせて、最終的にラサ（芸術的な満足感、至福）の状態へと導くものと定義されている。

この理論は現代インドのマサラ映画にも取り入れられている。物語には涙あり笑いあり、勇気が出る、ヒヤヒヤする、幸せになるなどの感情がすべて入っており、映画にのめり込んだ観客は見終わると何とも言えない爽快さを感じる。このときに観客が感じている爽快さがまさしくラサである。

インド演劇や舞踊ではさまざまな感情を引き起こすために、片手と両手による表現を組み合わせる。しかし、手の表現は具体的な行動を意味するのではなく、暗示的な表現で文脈のみを伝える。ゆえに何を意味するかではなく、その表現がどのような状況で使われるかを想像しなくてはならない。つまり、インド演劇を鑑賞するということは、我々が慣れ親しんだ言語による論理的な思考から離れて、体験的なものから連想して感じとることである。そうすることで、人々は世俗社会の感覚から一時的に解放される。演劇におけるラサとは一種の解脱であると結論付けていた。

第5回は、イランの殉教劇（タアズィエ）についてイラン地域研究の山岸智子先生が解説した。タアズィエはイスラームの宗教指導者イマームの殉教を再現した演劇で、哀悼儀礼に含まれる。特に第3代イマームとその遺族が殺害された「カルバラーの悲劇」を哀悼する行事はシーア派信徒にとって大きな意味を持っている。

哀悼の表現は、担ぎものを伴った行列など多種多様な形態が取られているが、19世紀カージャー朝において演劇形式の哀悼行事が発展した。イマームと女性役は顔をベールで被う、緑の衣装はイマーム側／赤は敵役、イマーム側の台詞は韻文／敵役は散文というよう

に非写実的で、象徴を多用した形式が取られている。

タアズィエがキリスト教の受難劇と類似していることもあり、19世紀末にイランにきたヨーロッパ人たちに注目された。イラン側も、自分たちが高度な文化を持ったアーリア民族であることの証左としてタアズィエを活用するようになった。

その後、近代化のなかでタアズィエは顧みられなくなるが、1970年代にアメリカの後援や石油収入の急増に伴って文化事業に力が入れられた。そのなかでタアズィエの復元が行われて、東西の名だたる芸術家を招いた芸術祭で披露された。ピーター・ブルックが感銘を受けてエッセーを執筆するなど欧米の演劇人や研究者の注目を浴びて、アヴァンギャルドな演劇として再び高く評価されるようになった。

第6回はラテンアメリカ演劇研究の吉川恵美子先生がラテンアメリカ演劇の歴史と近年の注目すべき作品について講義を行った。ラテンアメリカ演劇の歴史はアステカ帝国の時代まで遡ることができる。アステカ帝国時代の儀礼で、高度な歌舞音曲が見られる「ナワトル演劇」の記録が残されている。植民地時代の初期には「布教演劇」も存在したが、17世紀にスペイン黄金世紀演劇が輸入されて以降、1930年代までスペイン演劇の強い影響下にあった。

1930年代から徐々に刷新の試みが行われた。ソ連で当時最先端の演劇を学んだ日本人で、1939年にメキシコに亡命した佐野碩は、現地でも演劇活動を行い「メキシコ演劇の父」として知られている。その後、1959年のキューバ革命を機にラテンアメリカ固有の演劇のあり方の探求が活発化した。被抑圧者が主体となる演劇が志向されて、戯曲や劇場など既存の演劇システムからの離脱がなされた。

この流れは現在まで継続している。事例として、ペルー内戦について劇団員自らが調査探求した内容を作品化して地域住民に抑圧に立ち向かうことを促したペルーの演劇や、アルゼンチン軍政の経験から相互不信に陥っていたブエノスアイレスのとある地区の住民たちが役者として共に演劇を作り上げることで相互理解を促したコミュニティ演劇などが紹介された。これらの演劇は実際に社会に対して良い影響を与えている。以上のような現代ラテンアメリカ演劇のあり方は演劇は決して「不要不急」なものはないと人々に示している。

多文化教育研究プロジェクト 連続セミナー
「多文化共生としての舞台芸術」

第1回「共生社会と現代演劇」

日時：2022年5月24日(火) 18:00～19:30

講師：平田栄一郎 (慶應義塾大学文学部教授)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第1回「共生社会と演劇」

2022年5月24日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

●内容
「共生社会」が求められる多文化共生社会の発展のために、私たちは異なる価値観を尊重するだけでなく「理解」しようとする姿勢のあり方を模索することも必要です。私たちはよくよく「多文化共生」といふ言葉の本来の意味を改めて考えてみる必要があります。このセミナーは、多文化共生のあり方を模索するための第一歩として開催いたします。このセミナーは、異なる価値観を尊重する姿勢のあり方を模索するための第一歩として開催いたします。本講座では、異文化や多文化を受け入れるための第一歩として、異文化共生社会のために何をすべきかについて講じます。

●講師
平田 栄一郎
演劇学・ドイツ演劇研究、1997年慶應義塾大学文学部助教授、1999年から2004年までベルリン・フランクフルト大学に在籍。博士(文学)。著書『異文化共生社会と演劇』(2011年)、『共生社会と演劇』(2012年)、『共生社会と演劇』(2013年)、『共生社会と演劇』(2014年)、『共生社会と演劇』(2015年)、『共生社会と演劇』(2016年)、『共生社会と演劇』(2017年)、『共生社会と演劇』(2018年)、『共生社会と演劇』(2019年)、『共生社会と演劇』(2020年)、『共生社会と演劇』(2021年)、『共生社会と演劇』(2022年)。

一般公開・参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は下記のコードか本学ウェブサイトからお申し込みください。

問い合わせ 山口 裕之 (東京外国語大学教授) yokyama.yayaka@tufs.ac.jp
主催 東京外国語大学 総合文化研究所
共催 東京外国語大学 総合文化研究所

第2回「ウガンダの舞台空間に見る音と身体」

日時：2022年6月14日(火) 18:00～19:30

講師：大門碧 (北海道大学国際連携機構所属)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第2回「ウガンダの舞台空間に見る音と身体」

2022年6月14日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

●内容
多様な文化が交差し、音と身体が交差する多文化共生社会の発展のために、私たちは異なる価値観を尊重するだけでなく「理解」しようとする姿勢のあり方を模索することも必要です。私たちはよくよく「多文化共生」といふ言葉の本来の意味を改めて考えてみる必要があります。このセミナーは、多文化共生のあり方を模索するための第一歩として開催いたします。このセミナーは、異なる価値観を尊重する姿勢のあり方を模索するための第一歩として開催いたします。本講座では、異文化や多文化を受け入れるための第一歩として、異文化共生社会のために何をすべきかについて講じます。

●講師
大門 碧
1982年生。北海道大学国際連携機構所属。ケニアに留学し、演劇学を学ぶ。博士(文学)。著書『ウガンダの舞台空間に見る音と身体』(2021年)、『ウガンダの舞台空間に見る音と身体』(2022年)。

一般公開・参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は下記のコードか本学ウェブサイトからお申し込みください。

問い合わせ 山口 裕之 (東京外国語大学教授) yokyama.yayaka@tufs.ac.jp
主催 東京外国語大学 言語文化学部
共催 東京外国語大学 総合文化研究所

第3回「中国の現代演劇と日本」

日時：2022年7月26日(火) 18:00～19:30

講師：飯塚容 (中央大学文学部教授)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第3回「中国の現代演劇と日本」

2022年7月26日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

●内容
中国の現代演劇は「伝統」と呼ばれ、20世紀初頭に西洋演劇の影響を受けて誕生した。本講座ではその歴史について、中国の演劇界が日本を模して中国で演劇を創出した歴史を振り返る。中国の演劇界は、20世紀初頭に西洋演劇の影響を受けて誕生した。本講座ではその歴史について、中国の演劇界が日本を模して中国で演劇を創出した歴史を振り返る。中国の演劇界は、20世紀初頭に西洋演劇の影響を受けて誕生した。本講座ではその歴史について、中国の演劇界が日本を模して中国で演劇を創出した歴史を振り返る。

●講師
飯塚 容
中央大学文学部教授。中国近代文学・演劇研究。1982年東京国立大学大学院文学部研究科博士課程修了。著書『中国の現代演劇』(2011年)、『中国の現代演劇』(2012年)、『中国の現代演劇』(2013年)、『中国の現代演劇』(2014年)、『中国の現代演劇』(2015年)、『中国の現代演劇』(2016年)、『中国の現代演劇』(2017年)、『中国の現代演劇』(2018年)、『中国の現代演劇』(2019年)、『中国の現代演劇』(2020年)、『中国の現代演劇』(2021年)、『中国の現代演劇』(2022年)。

一般公開・参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は下記のコードか本学ウェブサイトからお申し込みください。

問い合わせ 山口 裕之 (東京外国語大学教授) yokyama.yayaka@tufs.ac.jp
主催 東京外国語大学 言語文化学部
共催 東京外国語大学 総合文化研究所

第4回「インド演劇踏査から多様と共生を考える」
日時：2022年10月11日(火) 18:00～19:30
講師：宮尾慈良(比較演劇学)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第4回「インド演劇踏査から多様と共生を考える」

2022年10月11日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

◆内容
インドはあまりにも広すぎる。地理や歴史が異なるため、その国の歴史文化の言語、宗教、カースト、文法、音楽、舞踏、美術、建築など、多岐にわたる多様な文化が共存している。また、多様な文化が融合し、新たな文化を生み出している。その中で、多様な文化が共存し、共生している。その中で、多様な文化が共存し、共生している。その中で、多様な文化が共存し、共生している。

◆講師
宮尾慈良
みやお ともよ
比較演劇学、2019年東京都立大学総合文化研究センター特別講師、2017-2019年法政大学大学院、21-22年法政大学総合文化研究センター特別講師、2021年法政大学総合文化研究センター特別講師、2021年法政大学総合文化研究センター特別講師、2021年法政大学総合文化研究センター特別講師。

一般公開
参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は
下記のコードを
Zoomウェビナーから
お申し込みください。

📞 問い合わせ 横山 綾香 (アシスタント) yokoyama.yuka.o@tufs.ac.jp

第5回「イランの殉教劇(タズィエ)と多文化の出会い」
日時：2022年11月1日(火) 18:00～19:30
講師：山岸智子(明治大学政治経済学部専任教員)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第5回「イランの殉教劇(タズィエ)と多文化の出会い」

2022年11月1日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

◆内容
「タズィエ」は、イランの伝統的な演劇形式である。これは、イランの歴史、文化、宗教を反映している。この演劇形式は、イランの多様な文化を表現している。この演劇形式は、イランの多様な文化を表現している。この演劇形式は、イランの多様な文化を表現している。

◆講師
山岸 智子
やまがし ともこ
文学部、イラン文学専攻、2009年専攻長、2010年専攻長、2011年専攻長、2012年専攻長、2013年専攻長、2014年専攻長、2015年専攻長、2016年専攻長、2017年専攻長、2018年専攻長、2019年専攻長、2020年専攻長、2021年専攻長、2022年専攻長。

一般公開
参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は
下記のコードを
Zoomウェビナーから
お申し込みください。

📞 問い合わせ 横山 綾香 (アシスタント) yokoyama.yuka.o@tufs.ac.jp

第6回「演劇は誰のもの？ 南米演劇にみる多文化共生」
日時：2022年12月6日(火) 18:00～19:30
講師：吉川恵美子(上智大学名誉教授)

多文化共生としての舞台芸術 2022

第6回「演劇は誰のもの？ 南米演劇にみる多文化共生」

2022年12月6日(火) 18:00-19:30
Zoomウェビナーによる開催

◆内容
「カポアリア」は、南米の演劇形式である。これは、南米の歴史、文化、宗教を反映している。この演劇形式は、南米の多様な文化を表現している。この演劇形式は、南米の多様な文化を表現している。この演劇形式は、南米の多様な文化を表現している。

◆講師
吉川恵美子
よしかわ えみこ
演劇学、1992年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2000年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2002年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2004年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2006年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2008年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2010年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2012年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2014年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2016年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2018年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2020年上智大学文学部演劇学専攻専任講師、2022年上智大学文学部演劇学専攻専任講師。

一般公開
参加費無料
事前申込制
参加ご希望の方は
下記のコードを
Zoomウェビナーから
お申し込みください。

📞 問い合わせ 横山 綾香 (アシスタント) yokoyama.yuka.o@tufs.ac.jp